

Title	「生きる力」を創る仕事：東北被災地からリーダーを輩出
Sub Title	
Author	坪内, 南(Tsubouchi, Minami)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2012
Jtitle	人間教育講座：社会を知る自分を知る自分を育てる (2012.) ,p.73- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20120000-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「生きる力」を創る仕事

～東北被災地からリーダーを輩出

一般財団法人教育支援グローバル基金理事・事務局長

坪内 南



つぼうち・みなみ 二〇〇〇年九月慶應義塾大学総合政策学部卒業（一九九九年塾生交換留学生として韓国・梨花女子大学に留学）。College Women's Association Japan（CWAJ）及び日本／世界銀行共同大学院奨学金プログラムの奨学生として、マサチューセッツ工科大学都市計画修士課程修了。マッキンゼー・アンド・カンパニー、難民を助ける会カプール事務所駐在、世界経済フォーラム（ダボス会議事務局）、バーレーン経済開発委員会などを経て、二〇一一年六月より現職。より広い社会、新しい世界を経験し、志を持つ仲間と切磋琢磨することこそが、広い視野を持つリーダーの育成に不可欠と考え、そのような機会を若い世代が持つことが東北の復興につながると思われ、教育支援グローバル基金の設立に参画。東日本大震災で被災した学生のグローバルな視野をもったリーダーへの成長を応援するプロジェクト「ピョンドトゥモロー」に参画中。二〇〇四年、社会貢献支援財団21世紀若者賞受賞。

はじめに

これから一時間ほど、東北の被災地を対象に行っているリーダーシップ教育支援「ビヨンドトゥモロー」(BEYOND Tomorrow、一般財団法人教育支援グローバル基金)の話と、そこに至るまでにどんな発想や思考があつて、ビヨンドトゥモローを始めることになったのかについて、お話させていただければと思っています。

この講座でこれまでに講演を行っていらっしやるのはすばらしい方ばかりで、今日私がお話しさせていただいたのが申し訳ないような気持ちもあります。でも、逆に考えてみると、私は慶應の総合政策学部を卒業していますし、皆さんと世代も近い。塾員としてどんなかたちで社会に関わっているかを聞いていただいて、将来を考える時のなにかのきっかけにさせていただければと思います。

今日のタイトルは「『生きる力』を創る仕事」とさせていただきました。今、私が行っている「ビヨンドトゥモロー」というプロジェクトは、二〇一一年の東日本大震災で大きく被災しながらも、広く世界や社会に貢献できる人間になりたい、と思う若い学生さんを応援するプロジェクトです。そこでリーダーになることが、広い意味で「生きる力」を見つけていくことにつながってほしいと考えてプロジェクトを始めています。ただ、この「生きる力」というのは何なのかというのはすごく漠然とした問いで、私自身も今ももちろん、毎日悩みながら生きています。この「生きる力」を見つけていくことが、なぜ私のなかで追求したいものになったのか——自分のこれまでを整理しながら話をしていきます。

高校留学で世界の不公平を目の当たりにする

実は私、日本の中学校を中退してしまして、日本では「小学校卒業」という状態に一度なっています。私の両親は地元で自営業をやっていて、すごくドメスティックな家だったのですけれども、私は小さな時からとにかく外の世界に行きたい子どもでした。母が今でも言うのですが、まだおむつが取れていなかった時に、ひとりで買い物に行くといつてきかなかった、まだおしゃべりもできなかった時に八百屋さんに行くと言ってきかなかったそうです。おそらく小さい頃から、なぜか外の世界に対して好奇心のある子どもだったのだと思います。

中学校に上がる頃になると、私は「海外に行きたい」「海外の学校に行くんだ」と騒ぎ始めました。あまりにうるさいので、両親が「じゃあ、夏休みの一カ月間短期留学プログラムに行かせたら、英語もできないし、ホームシックになって、たいへんなことが分かって帰ってくるだろう」と思って、中学二年生の時にカナダのトロントであった三週間プログラムに行かせてもらいました。ところが、あきらめて帰ってくるだろうと思った親の期待とは裏腹に、私は余計に調子に乗って帰ってきて、今度は「三週間では物足りない。日本の学校はもうやめて留学したい」と大騒ぎをしたのです。両親は「何を言っているのか」と当然思うわけです。母はパスポートを持ったこともない人で、父は香港に社員旅行で行ったぐらいの海外経験しかなかった人ですから、「この子は英語もできないし、放っておけば、どうせ熱が冷めるだろう」と放置されました。

ところが放置されている間に、私は着実に計画を進めていきました。当時はインターネットがなかった

ので、夏休みのプログラムで出会った先生に、“I want to go to school in Canada.”というような手紙を書いていたんですね。今から思うと、とても親切な先生だったと思うのですが、その先生が、寮がついている学校のパンフレットを四校分、送ってきてくれました。親が私を無視して放置している間に、辞書を使って願書を書いて送ってみたところ、ひとつの学校から合格通知が届きました。そこで親に「合格したよ」と言ったのですが、親はいつの間にこんなことをやっていたんだと思うわけです。そこから二カ月間、毎日ケンカが続きました。最終的には両親もケンカすることに疲れて、うちの両親もこりないのですが、「じゃあ、一年間行かせれば、きつとこりて帰ってくるだろう」と思って、一年間行かせてくれることになりました。一年後に私はもつと調子に乗って帰ってきて、卒業するまでいるからと、結局高校卒業までカナダで過ごすことになりました。

カナダ留学の後半、私はインターナショナルスクールに行っています。このインターナショナルスクールには世界の七〇カ国ぐらいからの学生が集まっていました。普通のインターナショナルスクールは学費が高いのですが、私が行っていたところは全部奨学金で通える、少し特別なユナイテッド・ワールド・カレッジという高校です。奨学金を出すことによって、世界中のどんなに貧しい学生でも留学できて、国際理解を進めるために学ぶことができるという学校でした。

ですから、たとえばアフリカやアジアなどの貧しい国から、貧しい学生がチャンスを求めて来ているのかなど私は思っていたのですが、そんなことはありませんでした。そこにおいてすごく衝撃だったのは、実は途上国から来ている学生の方が富裕層の出身だったんですね。たとえば今の日本では、もちろんすごく貧しかったらできないことかもしれませんが、億万長者の家などそれほど特殊な環境に生まれなく

ても、たいいていの人々が海外留学をすることができると思っています。でも、たとえばバングラディシユやネパール、アフリカのコンゴといった国では、貧しい人は字の読み書きもできない状態です。だから、留学の情報も奨学金があるという情報も知らないし、ましてや試験を受けるところに行く交通手段なんかもってないんですね。そういう試験を受けて、英語で教育を受ける学校に来ることが出来る人というのはものすごいお金持ちに限られるわけです。

この現実を知ったことが、私のなかではものすごい原体験になっています。世の中の不公平を公平にするために奨学金を作ったとしても、そういうものを享受できる人はすごくひと握りの人なのだ。こういった不公平を解決できるようなことをしたいという気持ちは、その時から私の中で少しずつ膨らんでいったのだと思います。

高校を卒業する頃には、私も少しこりたのか、日本で大学に行きたいという気持ちがすごく強くなつて、慶應大学の総合政策学部に入りました。大学に通っている間にもひとつ転機があったのです。それは「開発計画論」という授業でした。世界銀行で働いていた先生による授業だったのですが、授業の最初に、ミャンマーで反政府ゲリラ活動をしていた人がつかまって、拷問を受けて殺されていく写真を見せられたんですね。その写真を見せながら、先生は、「今、この教室に座っているあなたたちは、世界のなかでも限られた、なにか社会のために変革を起こすことができる人たちだ。こういうふうには自由を求めて命を落としていく人たちがいるなかで、自分たちに何ができるのかを考えてください」と言いました。こう言われた時に、頭をものすごく強く殴られたような衝撃がありました。

実は高校を卒業してからその時まで二、三年が経過しているのですが、高校の時に、世の中の

不公平や、機会が限られた人にしか与えられないことをナマで感じたはずなのに、私はそれをすっかり忘れて暮らしていたわけです。そのことが自分のなかで衝撃でした。その先生が言う通り、大学に行くことは、日本にいたらそれほど特殊なことではないにせよ、世界的に見たら、こういうふうな食べ物があって、そして大学に行くことができる状況にいることは、やはり恵まれてるわけです。恵まれているのだから、恵まれている人間としての責務を果たしながら生きていきたいと思ったのが、大学の終わりの頃でした。

その時から、困っている人たちの役に立つてどういふことなのだろうという問いと悩みが始まります。この答えは今になってももちろん見つかっていません。でも、困っている人を助けるといふ時に、アフリカで困っている人がいる時に、たとえばパンを届けに行くのもひとつの助け方だと思ふし、一方で読み書きを教えるのも助け方だと思ふし、もしくは日本に来る機会を提供することも助け方だと思ふ。一体、どういふ助け方に意味があるのだろうかと考え始めるようになりました。

九・一一を機にマッキンゼーを退社

大学を卒業して、まず入ったのはマッキンゼーというコンサルティング会社です。ここで経営のことを勉強しておけば、将来的に途上国や貧困の問題などを解決する時に役に立つのではないかと思つて入りました。ところがいったん入社してみると、猛烈に忙しかつた。とにかく毎日朝まで働いて、途上国や貧困という言葉が自分の頭の中からなくなるくらい働いていました。「こんなに働いているけ

れど、私がかもともやりたかつたことって何だつたのだらうか」と思つていた時に、九・一一が起きます。同時多発テロ事件は今から一一年前に起きたことなので、おそらく今ここにいるみなさんは当時、小学生だつたのではないでしょう。あの事件は、それを知つた世界中のすべての人々にとつて世界を震撼させるような大事件でした。私はその時、マッキンゼーで仕事をしていました。オフィスがアメリカ大使館の斜め前にあつたので、普段は朝まで働く会社なのですが、その時だけはもう全員、帰りなさいという話になつて、そして世界中の空港がストップして、一体明日何が起きるんだらうという状況に陥りました。

私もその時に、「これだけ明日何が起きるのか分からない人生だつたら、自分が本当にもともとやりたいと思つてゐることをやらなければ」と思いました。そして大学の最後の時に先生から聞いた言葉などを思い出して、同じだけ大変な思いをして仕事をするのだつたら、もともと自分が思つてゐるような、困つてゐる人の役に立つような仕事をしたと思つて、えいや！ と会社をやめてしまいました。それが入社二年目の冬です。

マッキンゼーという会社は転職者が多いのですが、当時はベンチャー企業や外資系の金融などの転職先が多いので、会社をやめると言うと、会社の人たちはみんな「どこにヘッドハンティングされたんだ」「どこに引き抜かれたんだ」と思うわけです。ところが私は「いや、アフガニスタンに行きます」と言つたので、みんな、「はあ？」という感じでした。今では社会起業やNGOなど、わりと受け入れられるような時代になつた気がするのですが、当時は「アフガニスタンってどこですか？」というようなことを言う人もいました。その時は私もそれほどツツがあつたわけではないですし、おそらくや

フリーで「途上国 仕事」というようなキーワードで検索したのだと思います。そしてそこにたまたま出てきたNGOに応募しました。

私は、カンボジアでもユーゴスラビアでも、行けるところに行こうと思って面接を受けに行つたのですが、そこで「今、あなたが行けるところはアフガニスタンです。そこにポジションがありません」と言われました。九・一一からまだ二、三カ月しか経ってない頃です。「私が行つてもいいんですか?」という気持ちもありながら、怖い気持ちもあり、もちろん多少迷いました。しかし考えてみれば、そういうところにいる人たちのために仕事をしたいと会社をやめようと思つたのだから、危ないから行かないと言つたら、一生もうそういう仕事はしないだろうと思つたので、「じゃあ、行きませう」と答えて、アフガニスタンに行きました。

「ビヨンドトゥモロー」の原型／アフガニスタンのNGO

アフガニスタンに実際にたどり着いたのは、九・一一から半年ちょっと経つた頃の二〇〇二年五月です。私はアフガニスタンにその後一年半いることになるのですが、すごく楽しかったんですね。今までのいろいろな活動にしても、ひとつひとつすべて意味があったのですが、アフガニスタンはすごく人が良かったし、歴史もある国だし、さらに「戦争が終わって社会がよくなつていくのはこういうことなんだな」と体感できる時期だったからです。最近ではタリバンの復活などでアフガニスタンの状況が悪くなっていますが、私が入った時は、タリバンがいなくなつて半年ぐらいの時でした。最初

に着いた時には、電話も、電気も、水もなかった。でも私がいる一年半の間に、ある日電気が来たり、電話が入ったりというように、戦争が終わって社会のインフラが出来ていくのはこういうことなんだなと体感できました。もちろん日本でも、戦後はそういう時代があったのだと思いますが、今、先進国に住んでいると、なかなかないチャンスだと思います。それを体感できることはすごくエキサイティングでした。

今振り返ると、ビヨンドトゥモローの原型となったと思う出来事が、このアフガニスタン時代にありました。私が入ったNGOは地雷撤去支援をしている団体です。アフガニスタンは世界有数の地雷埋設国で、その地雷による被害が多い国なので、地雷除去の資金提供をしたり、地雷除去が進まないところで、地雷原に入っただけじゃないよという地雷回避教育のプロジェクトの運営をしたりしていました。

ある時、日本で地雷サミットをやることになり、実際に地雷被害者を日本に招聘しようというムーブメントがあつて、私たちの団体にアフガニスタンで地雷被害者を探して派遣してくださいという話がきました。一〇代の子どもなどいろいろな条件があつて、私たちは探しに行くのですが、カブールから四、五時間離れた何もない村でひとりの少年と出会います。

彼の名前はナディール・シャールと言ひ、地雷を踏んで片目と片手を失っていました。彼がいたあたりの地域では障害者に対する差別がかなりあり、障害がある子どもや人はなかなか外に出してもらえません。もしくは家の外にいと、だいたいはいは乞食をするしか生きる道がないなかで、彼も例外ではなく、ずっと家の中において学校に行かせてもらえなかつたので、読み書きもできませんでした。両親も、障害がある子だと、彼を捨ててしまつて、親戚と暮らしていました。だから自分の生年月日も

知らなかったんですね。私たちは彼に「日本に行ってみようじゃないか」という話をしました。おそらく彼は日本に行くことが何を意味するかも分からなかったと思うのですが、まあ、行きますととなって、パスポートを取るにしても生年月日が分からないので、「じゃあ、もう一七歳にしましょう。決めた。それであなたの誕生日は〇〇年△月×日ね。覚えてね」というように進めていったわけです。次に行った時に違う誕生日を言うので、「ちゃんと暗記してください」みたいな感じで、生年月日を作る。ところから始まりました。

初めて私が彼に出会った時に印象的だったのは、そういう生い立ちだからなのか、まったく笑わないことでした。たとえば「お茶、飲む？」とか話しかけると、誠実な感じは伝わってきて、すごくいい子だと分かるのですが、ほほえみすら浮かべることがない子だったんです。その彼が、新しいパスポートを手に、日本に一週間行きました。日本にいる間にサミットに出席したり、アフガニスタンの地雷の状況についてスピーチしたり、記者会見に出たりなど、アフガニスタンの状況を世界に知ってもらう役割を果たします。実は私はその時、日本に同行できなくて、カブールで待っていたんですね。一週間経って日本から帰ってきた彼は、別人みたいにすごく変わっていました。笑顔があつて、顔に表情があつて、自信にあふれていて、まったく違う表情で帰ってきました。

帰ってきてから彼は、自分は広い世界を知って、自分にできることを見たと、まず学校に行き始めて、読み書きを勉強します。その後、赤十字の英語の教室に夜間通って英語の勉強をして、そして最終的にはエクセルや経理の勉強までして、今では私が働いていたNGOの会計係として働いているんです。初めて出会った時は生年月日も知らないし、読み書きもできないし、まったく笑わなかった人が、たった

一週間というチャンスでこんなにも変わるのが大きな衝撃で、後でお話する「ビヨンドトゥモロー」のプロジェクトのコンセプトにつながっているのではないかなと、振り返って思ったりもします。

グローバル・アジェンダを学ぶ「世界経済フォーラム

アフガニスタンにいた時に、もうひとつ大きな事件がありました。それはイラク戦争が始まったことです。

みなさんが覚えていらっしゃるかどうかは分かりませんが、ブッシュ大統領がイラクのフセイン大統領に「四八時間以内に亡命しないとイラクを攻撃する」と宣告したことでイラク戦争が始まるわけですが、その亡命を待っている四八時間の間に、アフガニスタンにいる外国人は全員国外退去するようという指示が、各国の政府から出しました。イラクとアフガニスタンとはもちろん別の国なのですが、世界がそういう状況になっているので、何が起きるか分からない、治安に問題があるので、すべての支援活動を停止して国外に出なさいということでした。ひとつひとつの農村で、地雷原の問題や貧困などに向き合っていることも、世界で起きていることにとっても大きな影響を受けてしまう。ひとつひとつの活動はとても非力な局面があるのだなと感じ、そういったことを大きく捉え直したいなど、私はグローバル・アジェンダ (Global Agenda、世界が直面する問題) に関心を持ち始めます。

もうひとつ、その時、私がいたのは日本のNGOです。でも、日本人だからとか、日本から来たとか言うこととは関係なく、世界で仕事ができるようになりたいという思いがすごく膨らんでいたんで

す。「日本から来た坪内さん」「日本の団体で働いている坪内さん」ではなく、どんな国から来ていても関係なく価値を出せるような人材になれたらいいなと思い始め、その後、スイスのジュネーブにある世界経済フォーラムで働くことになりました。

みなさんもご存じかもしれませんが、世界経済フォーラムは、ダボス会議という世界各国のリーダーが集まって、世界のためにどんなことができるかを議論するプラットフォームの場所なのですが、私はこの事務局で、三年間働きました。ここでは、たとえば中東だったり、アジアだったり、アメリカだったり、ヨーロッパだったり、そういうところでいろいろなアクションを起こしているリーダーたちが集まって議論をすることで、世界の課題をどう解決していこうかという話をするのです。違う価値観を持つ各地域の代表者たちが、その価値観同士ぶつかり合って、世界のアジェンダや潮流が決まっていく——このことに意味があるのだと思うようになりました。そして、これがここで学んだなかで最も大きなことです。

私の中にはそれまでのいろいろな体験や思いがありました。たとえば高校ではインターナショナルスクールに行ったとか、大学で自分ができることを見つめ直しなさいと言ってくれた先生がいたとか、アフガニスタンで出会った地雷被害者の少年の話があつたりとか、世界経済フォーラムでの経験があつたりとか、いろいろなものが積み重なった状態で、その上で、いろいろな価値観や文化、それぞれが持っている事情などを乗り越えて、違うものが対話できるプログラムを私はつくりたいという思いが沸々とわき起こり、その時に芽生えた思いがやがて私の夢になります。今から四、五年前でしょうか。そういう、世界中から若い人が集まって、それぞれが持っている価値観や宗教、

言語などをぶつけあって学びの場をつくるようなプログラムをつくりたいという企画案を勝手に妄想で書いていたんですね。それは今でも私のパソコンの中に入っています。

では、それを実現するためには何をしたらいいかと考えた時に、次の展開が出てきました。今、世界の中にはイスラム教の人、もしくはアラブの人たちが新興圏で大きな割合を占めている。その割には、それ以外の人たちは彼らのことを理解していないことが多いんですね。日本を見てももちろんそうで、イスラム教というと、何の悪気もなくちょっと怖いというイメージがあつたり、アラブというのがすごく遠い存在になっていたりすることが多い。そのイスラム教の人、あるいはアラブの人をナマの体験として知っておけば、自分の夢であるプログラムをつくる時にとっても大きな強みになるのではないかなと思つて、「中東で就職したい」と言い始めます。

ではどうやって中東で働けばいいのか、よく分からないままに、いろいろな人に話をしていたら、たまたま社会人の第一歩目となったマッキンゼーの会社にいたアメリカ人女性が、バーレーンという中東の島国の経済開発委員会で働いていて、一緒に働く人を探しているという話を聞きつけました。すぐに「私、バーレーンに行きたいです!」と言つて、バーレーンに行くことになりました。

戦車に囲まれた軟禁生活を体験しバーレーン

私が行くところ、行くところ、どこでも事件が起きますが、それはバーレーンでも例外ではありませんでした。

バーレーンは割と豊かな国です。産油国なのですが、サウジアラビアやアラブ首長国連邦などと比べると、もともと持っている石油の量が少ないんですね。向こう一〇年ぐらいでなくなるのではないかと言われていて、バーレーン政府はわりと早くから経済の多角化を始めました。あのあたりはどこもそうなのですが、バーレーンも王族の国なので、王様の息子の皇太子が経済開発委員会という組織をつくっていて、世界中からスキルのある外国人を採用していました。二〇一〇年の夏、私もそのチームに入ります。自分の中では四、五年間はいて、石油依存からの脱却が求められる国で、イスラム教の価値観や、アラブの人たちがどういうふう国際社会の中でプレゼンスを高めていくかに直に関わるのはおもしろいと思っていました。また、バーレーンではF1レースをやっていることをご存じの方も多いと思うのですが、私はそういうグローバルなプログラムを通じてバーレーンの認知度を高めるといって、グローバルマーケティング&コミュニケーションという仕事をしていて、F1も担当し、そういう仕事もおもしろいと思っていましたね。

そう思っていた時に、「アラブの春」と呼ばれる事件が起きます。エジプトでまず暴動が起きて、ムバラクが追放されます。バーレーンはずっと安全で、普通にデパートやホテルなどもある割と豊かな国だったので、誰もそんなことが起きるとは思っていなかったのですが、二〇一一年二月にデモが勃発しました。

バーレーンでなぜデモが起きたのか。イスラム教は世界的に見ると、スンニ派の人たちがほとんどで、シーア派は少数派です。イランとバーレーンではシーア派が多数派なのですが、バーレーンの政権を握っている王族がスンニ派なので、少数派のスンニ派の人たちがすごく豊かな暮らしをしたり、重要

な役職に就いていたりして、シリア派の人たちはずっと貧しいままでした。そんな時にエジプトで政権が打倒され、シリア派の人たちが、エジプトでできたのだから、バーレーンでもできるはずだと、何万人もの人たちがデモに立ち上がります。

奇しくもそのデモ会場が、私が住んでいたアパートの真ん前にある「真珠広場」という広場だったのです。デモ当日、デモが行われることも知らない私は、今から思えばすごく能天気過ぎていました。その日は動物園にラクダなどを見に行つて、夕飯は鍋でもしようかなと思つて帰りにスーパーで食材を買つて帰つてきたら、家の前に何万人もの人たちがいて、車を入れられない状態になっている。「いやあ、これはたいへんだ」という感じで何とか家に帰つて、とりあえず鍋は作つて食べたんですけども（笑）。三日ぐらい経つても、何万人もの人が引かないので、そろそろ食料を買い足した方がいいかなと思ひながら寝た夜、夜中にすごい銃声で目が覚めました。私の家の前に集まった何万人もの人たちに対して政府軍が銃を持って武力制圧に入つたのです。さらにサウジアラビアから戦車が送られてきて、その広場の周辺一帯は戦車で封鎖されてしまうのですけれども、その封鎖された中には私の家があつたわけです。戦車で封鎖されてしまったために、私も出られなくなつてしまいました。

その時の事件で私が痛感したのは、これだけ物質的に恵まれた社会でも自由を求めて命を落としていく人がいるということです。目の前で人が撃たれるのを見たことで私は大きな影響を受けました。その時も結構いろいろな人から「逃げろ」と言われたのですが、「非武装の市民に政府が銃を向けたことを世の中に知らせなければいけない」という勝手な使命感に燃えて、ツイッターで発信したり、NHKの電話取材を受けたりと、軟禁生活も結構忙しかつたんですね。戦車に取り囲まれて出かけられない時間

の中でそんなことをしていました。

東日本大震災を機に活動拠点を日本へ

そんなことをしていた翌月に、今度は東日本大震災が起きます。自分の国で大変なことが起きて、たくさんの人たちが大変な状況になっている。その時は、バーレーンにおいても大変な状況だし、日本も原発事故による放射能問題で帰らない方がいいんじゃないかと言われたりもするような状況で、どちらにいても大変な状況になった時に、「じゃあ、自分にできることは何なのだろう」と改めて考えたいですね。

バーレーンで非武装の市民に銃を向けたのは、残念ながら政府軍でした。私はその政府の中で働いていた人間でした。ここで自分に何ができるかを考えるよりも、もしかしたら日本の震災の被災地で何ができるかを考えた方がよりできることがあるのではないかと思い始めた時に、マッキンゼーや世界経済フォーラムでのつながりで知り合いだった方々と何かプロジェクトをしようではないかという話を持ち上がります。震災で想定しなかったような逆境を経験した若者が被災地にいたのであれば、これをバネに立ち上がる学生たちもきっといるのではないかというディスカッションが始まるんですね。それを聞いた時に、「もともと自分がやりたかった対話プログラムをこの被災地でできるのではないか。それができるのだったら、バーレーンから帰ってきて、その仕事を是非やりたい」と思い、手を挙げて日本に帰って来ることになりました。

震災が起こったのは二〇一一年三月一日です。私は三月末に一度日本に帰ってきて、女川と石巻を訪れました。これが初めて訪れた被災地です。当時は避難所に人があふれている状態で、被災地には緊急車両しか入れなかったんですけれども、いろいろと協力してくれる人がいて、車で入ることができました。そういう避難所などに、今ビヨンドトゥモローの学生として関わってくれている子たちがいたのかと思うと、不思議な気持ちになります。でも、その状況を見た時に思ったのは、「自分の国だから、自分が生まれた日本だから帰ってきて何かをしようというよりは、やっぱり二万人の人が亡くなる災害は、世界的に見てもたいへんなことなんだ。これが日本であろうが、ハイチであろうが、これだけたいへんなことが起きて、そしてもしかしたら自分に何かできるのだったら、これはやらな」とまたウソになるのではないかと、迷いなく日本に帰って来ることにしました。

そこからすぐに辞表を提出。帰国までの間に、日本でアルバイトとして協力してくれる人と書類を作り、六月に財団法人として設立されると同じタイミングで、日本に帰ってきて、プロジェクトを始めることになりました。

ビヨンドトゥモローとは

ここからビヨンドトゥモローとは何かという話をさせていただければと思います。

●ビデオ上映「おはよう日本」NHK

アナウンサー男性「昨日からお伝えしているインタビューシリーズ『二〇一一 被災地と向き合う』。今朝は被災地の高校生たちに教育支援を行う坪内南さんです」

アナウンサー女性「坪内さんは、震災で親や家を失った高校生たちを経済的に支えるだけでなく、さまざまな経験を積むチャンスを用意して、再び希望を取り戻す手助けをしようとしています。取り組みに寄せる思いを聞きました」

◎ナレーション「去年十月、被災した若者たちが集まるイベントが東京で開かれました。参加したのは、岩手や宮城、福島県の高中生。いずれも辛い被災体験を持っています」

高校生（女子）「母のことを助きたいけれど、このままここにいたら、私も流されて死んでしまう。助けるか、逃げるか。私は自分の命を選びました。今思い出しても涙がとまらない選択です」

高校生（女子）「何とか息を止め耐えようと思いましたが、すぐに息が出来なくなり、大量の水を飲みながら、私は死を覚悟しました……」

◎ナレーション「東北の未来を考えたい。実体験をもとに復興のあるべき姿を考えました。イベントを主催した坪内南さんです。これまで発展途上国の支援活動に携わってきました。紛争などで町や祖国を失った若者たち。教育支援によって希望を取り戻し、復興のリーダーとして成長する姿を目の当たりにしてきました。今回の震災でも後回しになりがちな教育支援こそ大切だと考えました。去年六月、知り合いに呼びかけて、

教育支援事業ビヨンドトゥモローを設立。奨学金を出す他、海外での研修など、さまざまなかたちで長期的に支えていくことにしました」

坪内さん「これだけ、一瞬にしてそれまでの現実が崩れ去った状態で、これだけの衝撃があったのであれば、必ずじゃあこれを復興させようという志で立ち上がる子たちがいるだろうと。周囲がこういった子たちの可能性を信じて、サポートしてあげられるような環境が整っていくことが重要だなと」

◎ナレーション「坪内さんはまず高校生に被災体験を世界に向けて語ってもらうことにしました。去年九月に行われた夏季ダボス会議で各国のリーダーを前に発言した高校生たち。自分たちの体験を伝えることに、大きな意味があると気づいたと言います」

坪内さん「参加する前は、震災というのは自分の個人の体験だったと思うんですね。自分の人生の中で起きた個人的な体験だったものが、世界のリーダーがその話を真剣に聞いて、自分の国の政策であったり、もしくはビジネスに反映させると言ってくれるのが、自分が発信することが東北の人たちのためになり、被災地の人たちのためになる。何かが変わるんだと思うんですね。」

◎ナレーション「また、被災した高校生たちが交流する場もつくりました。十月に開催した東北未来リーダーズサミット。辛い体験をひとりでは抱え込むのではなく、仲間と共有し、困難を乗り越えて欲しいと考えられています」

坪内さん「仲間と自分の辛い体験を話すというのが、いいことに、表に出るのか裏に出るのかというの、

私自身もとっても不安があったのですが、そんな大人の不安をよそに、本人たちは自分たちが支え合う仲間をその場で見つけて、そのサミットが終わった後に、『すぐたいへんなことがあって、死に方ばかり考えていた私に前に進む力を与えてくれたのが、このサミットで出会った仲間たちです』と。こういう場がこの子たちに前に向かう力というものを与えているのだなと」

◎ナレーション「高校生たちは今、新たな一步を踏み出そうとしています。先月、進学を希望する三年生を対象にした奨学金の面接が行われました。彼らは、震災後新たに抱いた将来の夢を語りました」

学生たち「若者である自分が先駆者となって、会社をつくることによって、東北の復興に貢献したいと思っております」「将来は医者になって、山田町に地域貢献できたらいいなと考えています」

◎ナレーション「かつてない逆境を経験した高校生たち。坪内さんは、彼らこそ日本の未来を担うリーダーになってくれると信じています」

坪内さん「一様にして私がおく印象的なのは、自分たちがかわいそうだから支援を受けているとは誰も思っていないんですね。自分たちは世界のため、東北のために立ち上がれると。それがやっぱり生き甲斐のある子たちに対する支援のニーズというのは逆に大きくなっていると思うんですね。簡単ではないですけども、ずっと続けていかなければいけないというふうにあります」

◎ナレーション「このビヨンドトゥモローが支援するのは、震災の時に、岩手、宮城、福島に住んでいた高校生です。返済不要の奨学金を提供するほか、今年はさらに国際的な会議に参加する機会を増やす予定です」

(ビデオ終了)

ビヨンドトゥモローの事業内容

簡単にビヨンドトゥモローが何をやっているかについてご説明させていただきます。

まず目的としては、被災した若者たちへのリーダーシップ支援と、グローバルモデルの構築があります。

被災した若者たちへのリーダーシップ支援は、先ほども申しあげた通り、東北の被災地の若者が逆境を乗り越えて「自分もこういうたいへんなことがあったから、世界にはもっとたいへんな人がいるはずだ」という共感力を持ったり、逆にこういう経験を種にチェンジメーカーを志して、広い意味での社会に貢献できる人材になっていたりする過程を支援します。

一方、今回は東北の被災地から始まったプロジェクトですが、こういう事業をやればやるほど、ユニバーサルな意味でこういった学びの場や対話の場が必要とされていると思う日々が続きます。ですから将来的には、たとえばハイチのような地震があったところや、スマトラのような津波が来たところなどでもこういったプロジェクトを行っていききたい、それがグローバルモデルの構築です。自然災

害は残念ながら防ぐことはできないのですが、「逆にそれがあったからこそ今日の自分がある」と言えるような人材育成ができるプロジェクトに育てていきたいと思っています。

具体的に何をやっているかですが、二本柱でスカラシッププログラムとリーダーシッププログラムを行っています。

スカラシッププログラムでは、大学に進学するための奨学金提供と、もうひとつは高校留学のための奨学金提供があります。高校留学では、日本の学校をやめて海外のボーディングスクール（全寮制学校）に入学し、卒業まで通うという、私の妹・弟のような存在をつくるようなことになるのですが、東北にそういう妹・弟のような存在をつくるべく奨学金の提供をしているほか、このボーディングスクールがパートナーとして関わってくれるようになりまして、各学校とのコーディネーションなどもプログラムの一貫としてやっています。

そしてこのスカラシッププログラムでは、財政支援だけではない点がビヨンドトゥモローのひとつの核になっています。それがリーダーシッププログラムです。リーダーシッププログラムでは、いろいろな領域で活躍する世界のリーダーとの対話を促すメンタリングや合宿的なプログラムです。ピデオでもご紹介した「東北未来リーダーズサミット」がまさにそうなのですが、こういったところでいろいろなことを考える場をつくったり、アンバサダープログラムで、先ほどの夏季ダボス会議に学生を派遣して、グローバルな場で東北の状況を発信してもらったりするプログラムも開催しています。お金の支援と内容の部分との両方が組み合わさることで、本当の意味での東北発のチェンジメーカーが生まれるのではないかと考えております。

メンターとして、慶應大学の竹中平蔵先生をはじめ、いろいろな分野で活躍していらっしやる方々に参加していただき、将来どういったことをしたいのか、それを実現するためにはどんな道があるのかというような話を学生たちと話す場を設けています。

二〇一一年度の六月に始まって、ちょうど先日、初年度が閉まったところです。奨学金事業として、二つのスカラシップを運営し、リーダーシッププログラムとして、ダボス会議への参加と東北未来リーダーズサミットの開催をしました。そのほか、二〇一二年からは、アメリカ人の高校生と日本人の被災学生が気仙沼まで実際に被災地を歩いて、アメリカに伝えたい被災地の姿を提言のかたちにとまとめたり、三月に東京で開催した三泊四日のスプリングプログラムで、震災から一年経った今だからこそ自分たちが世界に向けて発信したい自分との約束をつくってもらったり、あるいは三月の米国でのスプリングプログラムでは、被災学生三名がボストンに行き、ロングウッド・シンフォニー・オーケストラのコンサートで英語のスピーチをしたりするなどの活動をしました。

メディアにも日本国内外でいろいろたくさん大きく取り上げていただくことができましたが、何よりもおそらく一番だと思ふのは、やはり学生自身のナマの声だと思ひます。こういうことがあったことでいろいろなことが変わったというコメントが、やはり私にとっては個人的にも大きな励みになりますので、紹介させていただければと思ひます。

●コメント紹介

「(サミットへの)参加のオフアアは二二二人、合格は七〇人。そのなかに自分が含まれていることに驚き

を隠せないというのが正直な感想。参加させていただくからには、背筋を伸ばして最後まで取り組もうと思います」

「ビヨンドトゥモロー東北未来リーダーズサミットに参加して、強く希望を持ち生きていきたいと、今では少しずつですが思えるようになってきました」

「死にばかり考えていた私に前に進む力を与えてくれたのは、サミットで出会った仲間たち——これはお母さんを津波で亡くした子です。

「頑張れ東北とか、頑張ろう東北とかっていわれるけど、実際に私たちが頑張れる場っていうのはこれまでなかった。昨日までの三日間を思い返してみる——これもサミットです。

「本当にすこかったの一言。もう一回やりたい。想像以上で、一生ものになった」

「ビヨンドの主催するのって疲れるんだが辛い。それでいて勉強になることばかり。自分に足りないものとか、何を伸ばせばよいかとか、学校より勉強になる」

「なんのために頑張るのだろうの解が出た。ビヨンドトゥモローのために頑張ればいい」

こういったコメントを聞くと、それまでに学生たちが出会ったことのない学びの場、つまり対話だったり、グローバルな機会だったりという新しい経験が、いろいろなことを乗り越える力になっているといいなと思います。

リーダーシッププログラム

まだ調整中のものもあるのですが、新しいリーダーシッププログラムとして、米国プログラムを計画しています。このプログラムでは、復興とまちづくりをテーマに、ニューオーリンズやニューヨークを訪問し、ハリケーンカトリナや同時多発テロの後にどういう取り組みがアメリカで起きたのかを学び、その教訓から一体東北復興のために何を持ち帰りたいかをまとめていく予定です。

この米国プログラムは二〇一二年七月八月に開催します。まず二泊三日の事前研修をします。富士山の近辺の施設に学生全員に集まってもらい、国土交通省の方に都市計画の概論をレクチャーしていただいたり、英語でどんなことを発信できるのかというワークショップをしたりなど、事前研修をみっちりとした後で実際の旅に入ります。約二週間アメリカに行きまして、ニューオーリンズでハリケーンカトリナ後の復興活動の取り組みを勉強したり、ボストンで文化体験ホームステイを体験したり、ニューヨークでテロの後の取り組みを学びます。そして、最後にはワシントンで国務省の方などもお招きして最終発表をする予定です。

また、まだ夢半分、計画半分というかたちなのですが、ピョンドトゥモローの中東プログラムやヨーロッパプログラムというようなものも企画していきまして、先ほどお話したようなグローバルな展開をしていきたいと考えております。こういったものを、広く展開していけたらいいというのが今のピョンドトゥモローの目標です。

「生きる力」とは？ 日本の非営利活動の将来のために

私は「生きる力」とは何かについて、体现することを摸索しながらこのプロジェクトを運営していますが、プロジェクトの中で大切にしているエッセンスがいくつかあります。

ひとつはアフガニスタンの地雷被害者の少年の話から来ていますが、それまで自分がいた世界よりも広い世界を見ることが何か前に進む力になるのではないかと思っています。もうひとつは、これは中長期的な支援活動になると大切なことではないと思うのですが、ずっと支援され続けたい人はおそらく世の中にひとりもいないと思うんですね。もちろん緊急のフェーズでは物資をはじめとしたいろいろな物の支援が重要だと思いますが、中長期的に支援される人々が尊厳を持ったかたちで生きていくことを実現するためには、その人たち自身が社会にとって必要であると感じられるような場だったり、過程だったりをつくっていくことが大切だと思います。

それはたとえばアフガニスタンの少年の話であれば、自分が日本に行って発信することが、たとえば国際社会が地雷に取り組むことのきっかけになる、あるいはもう少し草の根の話であれば、自分が会計の仕事をする事で国際的なNGOの活動に関わることができるといった、自分が果たす役割を見つけるような支援をしていきたいと思っています。

また、直接事業の内容とは違うのですけれども、日本の非営利活動の将来も私は大切に育てていきたいと考えています。日本の非営利活動は、ビジネスなど他の領域に比べてまだ成長期にあると思うんです。だから今、社会のための活動をしたい大学生がNGOなど非営利の組織で仕事をしたいと思っ

でも、日々の暮らしや人生の安定のことを考えると飛び込みにくい。ところが、アメリカやヨーロッパではプロフェッショナルに運営されている非営利団体がたくさんあるので、優秀な人材が普通に就職する先としてなりえているわけです。そういったものを日本でも体現することが市民社会をつくるうえでとても重要なことだと私は思っています。

こうした非営利活動が、熱いハートがあつて自分の生活を犠牲にしてもかまわないという奇特な人や、もしくはもともと経済的にとても恵まれていて、別に生活のことを考えなくていいというような人だけに関わるものではなく、普通に優秀な人が志を持って入って入ることができるような領域にすべく、ビヨンドトゥモローがその一翼を担えるような存在になつたらいいなと思っております。

ビヨンドトゥモローの学生による震災体験談

今日実はビヨンドトゥモローに参加してくれている学生が二名来てくれているので、彼らの話を是非聞いていただければと思います。

まず、千葉君は大船渡市出身で、現在は宇都宮大学の一年生です。私たちのプログラムには東北未来リーダーズサミットの時から参加してくれていて、今年の春アメリカでのプログラムにも参加しました。

●ビヨンドトゥモロー参加者・千葉君

岩手県大船渡市出身の千葉です。このような自分の考えを口にする機会を与えてくださったビヨンドトゥ

モローの坪内さんや慶應義塾大学の皆さんに心から感謝したいと思います。これから僕が震災の時に体験したことや考えたことを話します。

震災の前日は思えばおかしな日でした。校庭の上空は午後四時だというのに深い赤に染まり、その中にはおびただしい数のカラスが群がっていたのです。何か変なことに気づいていればと、今でもそう思います。二〇一一年三月十一日十四時四六分一八秒、震災が発生した時、私は部活動中でした。未だかつて体験したことのない揺れに多くの生徒が興奮しているようでした。表情には笑みすら見られました。これからおれだけの悲しみを味わうことになるかも知らず、心のどこかで期待していた非日常の訪れを私たちはひそかにおもしろがってすらいたのです。海から五〇メートルの近さにある自宅とは連絡が取れませんでした。が、きっと裏山に避難しているはずだと思い、たいして心配もせず、その日は一日を学校で過ごし、次の朝、三陸鉄道のトンネルを通って、歩いて一時間ほどの道のりを帰りました。

トンネルを抜けた時、建物のない光景が広がりました。それはこれまでの情報で覚悟していた光景ではありませんでしたが、その世界には覚悟していなかった事実がありました。それはこの世界から母と祖母が消えていたことでした。はじめ、母と祖母が亡くなったと聞かされた時はまったく意味が分かりませんでした。家の裏山に連れて行かれ、車の中に母の脚を見た瞬間はこれまでの毎日を思い出し、昨日の母の顔を思い出し、そしてこれからの日々を考え、どれだけ辛かったのだろうかと思うと、叫ばずにはいられませんでした。私の手が母の顔を包んでも、そのぬくもりは冷えていくばかりで温かさが返ってくることは決してありませんでした。火葬はたまらなくいやでした。火葬しなくてはいけませんが、してほしくないジレンマに悩み、母の肉体が炎の中に消えていくのには耐えられませんでした。

それからの毎日に意味を見いだせず、「大丈夫か？」と聞かれても、なにが大丈夫なのかも分からないままに笑顔を作りました。毎日夢中で瓦礫を片づけました。母が津波にのまれたのは、私や弟たちの学習道具を二階へ運んでいたからだと言き、毎晩寝れずに自分を責めました。あの日、何かが変わってればと、いつも思いました。それでも今日まで自ら命を絶たず生きてこられたのは母や祖母、そして家族のために少しでも地元の復興のために尽力したいと考えるようになったからです。そしていつの日かそれが生き残った自分の使命であると考えようになりました。

私の住む大船渡市は水産業を軸に発展してきた町なので、魚やその加工品を運ぶ交通網の整理を軸とした町づくりが必要になると考えています。そこでただもとの大船渡市に戻すのではなく、災害に強い町にして暮らせるような町づくりをするために大学で今、建設工学を学んでいます。生き残った私たちにはやるべきことが多くありますが、人々の心の中から東日本大震災という出来事を風化させずに残していくところこそが大切であると考えています。現在日本では南海トラフや都市直下型などの巨大地震の想定が出ていますが、そういった状況下で僕たちが体験したことを発信し、災害を未然に防ぐことは出来なくても、避難を迅速にしたり、地震への意識を高く保ち続けることで、被害を最小限に食い止めることはできると思っています。そしてそうやっていけば、本当の意味で今回の教訓が生かされたことになっていくのだと思います。私のように悲しい思いをする子どもがこれ以上生まれないう、心の中に永遠に生きる母とともに強く生きていきたいと思えます。

ありがとうございます。次に、小川さんですが、彼女は岩手県釜石市箱崎町の出身です。実はピヨ

ンドトゥモローに参加したのは今年（二〇一二年）に入ってからなのですが、あれよあれよという間に彼女の元来の夢だった海外に行くという夢が実現して、五日後の日曜日にアメリカに旅立ちます。

●ビヨンドトゥモロー参加者・小川さん

小川アヤカです。岩手県釜石市から来ました。私は震災で家族全員を失いました。両親、姉、祖父母の全員がいなくなり、一七年間暮らした家も失いました。これ以上失うものはないというくらい、私はすべてを失い、ひとりぼっちになりました。

三月一日、地震の直後、私は母と祖母と三人で高台に避難しました。しかし黒い壁のような波は私たちのすぐ背後にまで迫っていました。その時、母が言った「津波だ！」という言葉が最後に聞いた母の言葉となりました。走って坂を上り、山を登り、私は助かりました。でもどこを探してもさつきまで一緒にいた母と祖母の姿はありませんでした。

翌日の朝、瓦礫の上を母と祖母の名前を呼びながら探しました。そして、数日後、姉が亡くなったこと、父が行方不明であることを知らされました。遺体安置所で姉と対面した時、私は姉の頬を触り、何度もありがとうと言いました。私の涙で姉の頬は濡れていました。私は姉から離れたくはありませんでしたが、火葬して姉は灰になってしまいました。そして行方不明の家族を捜す日々が続きました。亡くなった人の写真がおさめられているファイルを一枚一枚めくり、家族を捜しました。一ページ、一ページめくるたびに、衝撃が走りました。まだ幼い女の子、手足が曲がったままの遺体、私はたくさん遺体を見ました。もし、次のページが母だったら、父だったら、早く見つけてあげたいけれど、家族を全員失いひとりぼっちになっ

たという事実を受け入れられない私はページをめくることがこわかったです。その後、祖母と父は見つかりましたが、母と祖父は今も行方不明です。たった一瞬にしてあまりにも多くのものを失い、なぜ自分だけ助かったのかと心も魂もどこかに行ってしまった気持ちでした。

しかし、その後、多くのすばらしい出会いがあり、今の私はここに立つことができています。震災後数ヶ月は、高校を卒業したらどこかで働くのだろうとほんやり思っていました。けれど、たくさんの人々に出会い、世界が広がり、人と人のつながりのすばらしさを知り、そしてその過程でめばえたアメリカに留学するという夢は早くも今週実現することになりました。人は助け合い、支え合い、思い合いながら生きているのだと改めて実感しました。私がたくさんの方々からきっかけやチャンスをいただいたように、私も誰かにきっかけやチャンスを与えられる人間になりたいと思っています。将来は何かの分野で世界で活躍し、世界に貢献できる人間になりたいです。アメリカに留学し、ファッションデザイナーになるという新たな夢をめざして歩きはじめます。

姉はいつも弱い立場にある人のために行動する人でした。父からは思いやりをもって人と接することを学びました。母からは強く生きることを教わりました。家族が私に残してくれた思いや意思を胸に、与えられたチャンスを大切に、自分の可能性を信じ、そして何よりも自分の気持ちに素直に生きていきたいと思っています。今、生きていることに、生かされていることに心から感謝して毎日を過ごしています。そしてこれからも、自分が生かされていると心に思い続け生きていきます。

ありがとうございます。

こういう話を聞くと、震災を体験していない自分としては、自分たちがしっかり生きていかなければいけないと思わされます。ただし、あまり悲壮感はないプログラムでして、ピヨンドトウモロの学生の笑顔を見ていただければと思います。

質疑応答

Q1 学生A（理工学部修士2年生） 私も現在、被災地に学生を派遣して復興支援をする団体の運営に携わっています。そのうえでおうかがいしたいことがあります。ピヨンドトウモロは今回東北大地震というきっかけで活動されていると思うのですが、将来東北が復興した後にもそうしたプログラムを続けようとお考えでしょうか。また、僕たちも東北のニーズがなくなったら、日本中に社会問題はたくさんあると思うので、今回培ったプラットフォームを生かして、それ以外の場所にもボランティアを送りたいと考えていて、夏にNPO法人の申請をしようと考えているのですが、そういう活動に対するアドバイスやお考えがあればお聞かせ下さい。

A 震災以降のコンテクトで展開ということは、今ピヨンドトウモロが考えなければいけないことで、ふたつ可能性があるのではないかなと思っています。私たちピヨンドトウモロの理念の部分というのは「逆境がすぐれたリーダーをつくる」ことにあると思っています、その部分をユニバーサルなものとして広げていけるかたちを探していきたいと思っています。そのうちのひとつが、先ほども触れた、

たとえばハイチだったり、スマトラだったり、他の自然災害に対応できるようなモデルにしたいというのがひとつの可能性です。

もうひとつは、逆境というのは自然災害に限ったものではないと思うんですね。それはたとえば家庭環境の問題があるかもしれない、もしくは経済的な問題もあるかもしれないですし、もしくは障がいなどもあるかもしれない。いろいろな意味でのハンディキャップは多くの人が持っているもので、でもそれがすごく不幸なものだというのではなく、それがあつたからこそできることがあるはずだということを体現できるようなプロジェクトにしていけたらいいなと考えています。

つまり、地理的に考えて、ハイチなど他の自然災害を被つた場所に広げていくというアプローチと、もうひとつは逆境という定義を広げていくアプローチの二つがあるということですね。是非今後のピョンドトゥモローを見ていただけたらと思います。

今、なさっている活動はとてもしばらしいと思います。どの団体もそうだと思うのですが、こういう震災をきっかけに始まった活動は、残念ながら時間が経つと社会の関心が薄れていくなかで、どういふふうにサポーターやエンゲージメントを増やしていくかが課題になってきます。しかし、社会の関心が薄れていったとしても、自分の団体の活動に関わってくれる人の数や質を増やしていくことはできないことではないと思います。その部分をどんなふうにクリエイティブにつくっていくかは私たちのチャレンジでもあるのですが、是非一緒に挑戦していけたらなと思います。

Q2 学生B (理工学部修士2年生)

坪内さんが被災地の支援をなさろうと思ったきっかけとして、

日本人だからこそ支援するのではなくて、世界から見て大きな災害だから支援しようと思ったとおっしゃったと思うのですが、一方、学生の視点から見ると、自分たちの地域を復興したいと考えていると思います。学生からすると「共同体」、坪内さんからすると「世界から見た大きな災害」という、その認識の差をどう思っているのでしょうか。

A それはわりとよく寄せられる質問なのです。私は日本は自分のホームだとも思うのですが、外へ外へというようなニュアンスがある。一方、学生のなかには、世界で活躍したいという子もいれば、地元に戻りたいという子もいるかもしれません。

リーダーとは何かと考えた時に、私はやはり「共感力のある人間」ということが重要だと思っているんですね。その共感力というのは、自分のことだけではなくて、自分の隣の人、隣の隣の人、自分の町だったり、自分の国だったり、地球だったり、自分以外の遠くの人のことを考えることができること。最終的にその結果が遠いアフリカの国の人なのか、あるいは隣の家の人だったのかというのは、どちらも重要なことなので、どちらでもいいと思っています。ただ、自分の町さえよければ他の町はどうでもいい、自分の国さえよければ他の国はどうでもいいではなくて、ユニバーサルな意味でも共感力を持つてほしい。そして最終的に自分の活動の対象を見つけてほしいと思います。その対象が結果として自分の町になったり、隣の町になったり、もしくは遠くの国にいる人でもいい。いろいろな意味で、自分の興味や関心、現実的な制約などによって活動する領域を見つけていってくれたら、すごくすてきなことなのではないかと思っています。

Q3 学生C (環境情報学部4年生) 私は組織の運営に関心を持っています。震災の後にボランティア団体がたくさん生まれたと思うのですが、継続性がキーワードになっていると思います。ビヨンドトゥモローでは、財団という組織をどういうふうに経営されているのかをお聞きしたいと思います。たとえば三年、五年、一〇年後に今と同じだけの資金を集めていけるのか、企業から集めるのか、個人から集めるのかなど、そのあたりをおうかがいしたいです。

A 今、ビヨンドトゥモローの資金というのは基本的にすべて企業や財団の寄附なんです。個人からの寄附も一部ありますが、比率から言うと、企業・団体が多いです。その背景として、たいへんな震災があったというコンテクストに加えて、リーダーシップを育成することに対する世の中、ないし世界の関心が高まっているのを感じます。海外の企業や団体が日本に向けて何かを期待する時に、グローバルに活躍できる人材が育ってほしいという思いが、震災とは関係なくあるのだと思うんです。そのうえで、今回、東北でたいへんなことがあったのだから、そういう人材が生まれるはずだという掛け算を私たちは戦略的には重視していて、特に海外の企業や団体が東北のグローバル・リーダーシップの育成に向けて何かをしたいと思った時に、一番に選ばれる組織でありたいと思って活動しています。ただ、資金集めは一番たいへんなところなので、妙案があれば、私の方が聞きたいと思います(笑)。

Q4 学生D (理工学部博士3年生) 坪内さんが高校生で留学していた時に、世の中の不公平を変えたいと思ったとおっしゃっていたのですが、坪内さんが考える、公平な社会とはどういうものなのでしょうか。

A すごく難しい哲学的な質問ですが、直感的に言う、「頑張ればチャンスが得られる」なのかなあと思います。おそらく社会には恵まれた家系や地域などに生まれる人というのはどんな時代にもいると思います。それでも、そうした豊かな条件の下に生まれなかった人が何か良い未来を得たいと思つた時に、その扉が閉ざされていない状況をつくっていかたいなと思つています。たとえば震災があつたこと自体は外的要因で、別に自分が悪いことをしたから謂で地震が起きているわけではありません。しかし、もしも被災したことがひとつの不公平だつたとするなら、そこにチャンスを与えることは不公平を取り除くひとつの試みなのかなと思つています。

もうひとつ、組織の運営も私はとても重要だと思つています。先ほども少しお話したのですが、私是一部の特殊な人だけが関われる活動では、持続性がないと考えています。どんな状況に生まれた人でも、どんな環境にある人でも、スキルがあつて、志があるのであれば、こういう活動に入れるような仕組みをつくっていききたい。どんなに辛くても、自分の人生を犠牲にしてガッツでがんばるといふような精神論ではなく、普通に頑張れば誰にでもできるような仕組みの部分が大切だと思つているわけです。特に特異な環境や発想、性格がなくても、みんながまっとうに頑張れば、昨日よりもいい明日があるんじゃないかと思える環境があるのが、不公平感のない環境かなと思つたりします。